

太陽光・エコ照明・緑化事業に注力 総合エンジニアの(株)ハタノシステム

今回は、総合エンジニアリング企業「株式会社ハタノシステム」(東京都港区、波多野容子社長)取材しました。同社は、自家発電設備や環境保全設備の販売から企画・設計・施工・メンテナンスを自社一貫体制で提供しています。併せて、21世紀は人と地球環境の調和が時代のニーズになると予測し、いち早く、住環境に関する省エネ化やグリーン化の向上につながる環境事業全般に積極的に取り組んでいます。創業から64年間で5,000台以上の納入実績を誇るエンジン式発電設備に加え、新たにクリーンな再生可能エネルギーを活用する太陽光発電(PV)システム、市街地の環境保全に貢献する屋上緑化システム、消費電力を抑え環境にも優しい照明器具など電力コスト削減や環境保全にもつながるエコ商品の販売に注力しています。ハタノシステムの取り組みを紹介します。

創業の経緯

ハタノシステムは社是として「誠実と奉仕」「協調と創造」を掲げています。同社の創業は昭和21(1946)年10月1日。東京・中央区木挽町に設立した「合資会社王子機械製作所」が始まりでした。創業者の波多野龍吉氏は明治45(1912)年生まれ。大変な苦勞の末、戦前に中央大学を卒業後、松竹を経て浅野物産(現丸紅)に勤務していましたが、ビルマに出征し、現地で終戦を迎えました。1年間に及ぶ抑留生活後に復員した龍吉氏は焦土と化した東京で独立を決意し、英式と米式の旋盤5台、フライス旋盤1台、ボール旋盤1台を購入して旋盤加工や機械修理の注文を請け負いました。なお、波多野龍吉氏は後年、国内の原動機や電機関連企業を取りまとめ、通産省認可公益法人の社団法人日本内燃力発電設備協会を創設する際の最大の功労者です。本業の社長業と並行して、内発協創設以来、専務理事、副会長として奔走されました。その長年の功勞が認められて、平成元(1989)年5月には、藍綬褒章を受章されました。

昭和22(1947)年頃から山岡発動機工作所(現ヤンマー)製のディーゼルエンジンの修理を手がけ始めました。昭和23(1948)年2月に本社・工場を上野の池之端に移転し、10月に社名を「富士工業」に変更しました。同年は



創業者の波多野 龍吉氏 ハタノシステムの本社ビル

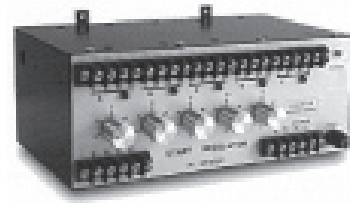
初めて、容量25kVAのディーゼル発電設備(空気噴射式)を埼玉県内の織物工場に納入しました。昭和24(1949)年10月には本社を千代田区神田鍛冶町へ移転。その頃からディーゼル発電設備の修理に加え、発電設備並びにディーゼルエンジンの販売、設置工事にも乗り出しました。当時、主力商品はワーケシャ、レロイ、ブダといった進駐軍の払い下げエンジンを搭載した中古の発電設備で、最大の娯楽だった映画の上映用や会場の照明用の電源として使用されていました。

波多野工業を設立

昭和25(1950)年6月1日、合資会社の事業を引き継ぎ、ディーゼル発電設備の販売・設置工事を事業目的とする新会社「波多野工業株式会社」を設立し、波多野龍吉氏が社長に就任しました。同年12月に大宮競輪場にワーケシャ製の容量12.5kVAの発電設備を納入しました。事業拡大に伴い、昭和27(1952)年5月に本社を港区芝4-4-10の現所在地に移転しました。翌28(1953)年8月にヤンマーの特約店となり、横型水冷エンジンを搭載した容量3~5kVAの発電設備を金融機関の照明用非常電源として納入を



黒煙削減装置



スタートコントローラー

開始しました。昭和35（1960）年には初の容量500kVA非常用発電設備を日本道路公団に納入しました。その後、昭和47（1972）年に社名を「ハタノ工業株式会社」に変更しました。平成4（1992）年に波多野龍吉氏の逝去に伴い、後任の社長として、波多野容子氏が就任しました。平成13（2001）年には「株式会社ハタノシステム」と社名を変更し、現在に至っています。



埼玉サービスセンターの屋根に設置した10kWのPVとPVモニター

発電設備の総合エンジニアリング

日本が高度経済成長に突入した昭和30（1955）年以降、各自治体は上下水道施設などの社会資本整備を急速に進めていきました。波多野工業は昭和34（1959）年、第一号受注品として、小金井市西部上水道施設向けに容量100kVAと150kVAの発電設備を納入しました。続いて、周辺7自治体にも容量200～1,000kVAの発電設備を納入し、ポンプ用エンジンの販売も開始しました。同年は首都道路公団向けに容量500kVAの非常用発電設備を納入するなど、その後も金融機関を中心にコンピューター端末用として容量10kVAの発電設備の販売台数を順調に伸ばしていきました。

現在、設備のメンテナンスは東京と埼玉の2か所に設置した同社サービスセンターで行っています。

昭和37（1962）年にヤンマーの要請を受けた波多野工業が中心となり、後に可搬型商品化モデルと言われる容量33kVAの可搬型発電設備を開発しました。また、「スタートコントローラー（通称スタコン）」を独自開発しました。スタコンは発電設備と組み合わせて、複数のモーターを時間差で順次起動する始動装置です。昭和52（1977）年、実用化に成功し、昭和62（1987）年に特許登録を行いました。発電設備容量を小さく収めたいユーザーのニーズから開発された商品です。また、トラックとエンジン発電機を一体化した「移動電源車」は自治体、電力会社などで、災害時、停電時などの非常用電源として導入されています。平成17（2005）年にはディーゼルエンジン起動時の黒煙を最大90%カットできる「黒煙削減装置」を開発しました。

波多野 容子 社長



偉大な実業家で内発協の実質創設者として政治的手腕にも優れた父龍吉氏は社員のために立派な本社ビルを遺しました。読書家でもあった氏は母校小学校に「ハタノ文庫」を創設し、図書を寄贈されました。一方、女性特有の繊細な感性を活かし次々と新事業を仕掛ける2代目・波多野容子社長。「私たちの仕事は、父が起草した誠実と奉仕に、平成4（1992）年の社長就任時に協調と創造を付け加えた企業理念に基づき、カンパニースピリッツ「It's wonderful to see you. あなたに会えて良かった」と言ってもらえる最高のサービスをお客様に提供する事に尽きます」（容子社長）。私生活では慈善活動に打ち込まれ、一昨年は「骨髄病患者の支援活動」のため、銀座博品館劇場の舞台公演『友情』に女優として出演されるなど熱心に取り組んでいます。実業と社会奉仕活動に燃えた父のDNAはしっかりと受け継がれています。

環境ビジネスに進出

ハタノシステムは平成9（1997）年からヤシ柄をリサイクルした植栽マット「ナチュラル大地くん」を用いた「屋上緑化事業」に進出しています。軽量のため工期とコストも従来工法の約半分で済みます。新事業は平成4（1992）年に就任した波多野容子社長の英断によるものでした。発電設備事業をベースとしつつ、環境の時代となる21世紀のニーズに適合する環境事業へ進出しよう。新社長から社員への決意表明でもありました。さらに新規事業として「水関連事業」「空調関連事業」に取り組み、平成15（2003）年から「ソーラー発電事業」、

平成20（2008）年から「ライティング事業」へ積極的に進出しています。ソーラー発電事業では京セラの技術代理店として首都圏の学校・水道局・官公庁施設を中心に納入しています。一方、ライティング事業では東京・大手町に完成した新・経団連ビル、群馬県太田市のティアラグリーンパレス等に間接照明（CCFL）の企画・納入を手がけています。引き続き、ハタノシステムは環境事業を積極的に推進される方針です。



ティアラグリーンパレスの室内照明